



## 「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第 6 回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

### 「行く手を照らす文化のともしび」

北京市 羅樹郁

日本の漢学者・内藤湖南がかつて言ったことに、日本文化は豆乳で、中国文化はそれを固めて豆腐にするニガリということがある。これは、中日の文化が長い関係史を有し、すっかり融け合っていることをよく示したものである。

中日両国の 2000 年に亘る交流史の中でも、特に文化交流には眩いばかりの輝きがある。文化において互いに学び、参考にし合うことにより、隣同士である中日両国は文化の精神的な面において異常なほど近づき、互いを包摂し合う関係にまでなったのである。

遙か昔、国力が強大であった隋から唐の時代、日本は相前後して 17 陣の遣隋使、遣唐使を中国へ派遣した。古代中国の先進的な文化を学んだ日本人の中には、吉備真備、阿倍仲麻呂、空海、最澄、橘逸勢といった著名人も含まれているが、無名の優れた人物はさらに多く存在した。両国の文化交流を促進するため、彼らは道中の困難や危険を恐れず、逆巻く大波を乗り越えたのである。少なからぬ人が船と共に海原へ沈み、多くの人々が様々な原因によって帰国できないまま異郷で生涯を終えたのだ。世界の歴史を見渡しても、日本のように数百年もの間、1つの国家に大量の使者を送り続けた国は少ない。この現象は、中華文明の巨大な影響力のみならず、日本国民の勉学を好む美質をも表している。

日本が全面的に中国を師と仰いでいた“唐風時代”から、中国が生徒、日本が師となる 19 世紀末までには約 1200 年という時間がある。日本の明治維新以降、両国の文化交流には別の光景が現れた。近代中国は西方の新しい人文思想、政治理念、芸術スタイルを取り入れたが、その多くは日本を経由したものである。当時、自然科学、人文・社会科学に携わっていた人々の大部分が、近代文化と救国の手がかりを求めて日本へ渡ったのである。王国維、陳寅恪、郭沫若、魯迅、郁達夫、周作人、田漢、夏衍、この一連の名前は誰もがご存じだろう。そして、中国近代文化史に名を残すこれら人々には、日本で学んだか仕事をしたという共通点がある。彼らは多くの新しい近代文化、思想を中国に持ち帰ったのである。近代文学の種々の重要な形式を導入し、近代の中国文化に大きな影響を及ぼしたのだ。それだけでない。李大釗、陳独秀、周恩来、廖仲愷、蔡鍔、秋瑾、張聞天らも、日本からの帰国後に中国政界の風雲児となったのである。しかも、この中には中国の政治の方向性に影響を与えた者もいるのだ。

隣国に平和なし、と言う人もいる。世界の歴史を見渡すと、強国が隣り合っている場合、平和を保つことは困難であると言える。例えば、欧州の諸大国では、近代、絶えず戦争が起こっていた。1930 年代、日本が中国への侵略戦争を始め、中日友好の絆にひびが入った。新世紀に入って以降は、両国の関係に曲折が絶えない。中日両国に生じた近代以降の恩讐は、どのように解消したらいいのだろうか？経済協力の強化だけでなく、文化の交流にも確かに一定の強大な効力があると思う。文化における交流や融合を通じて、心理面での和解と認め合いを追求してこそ、両国関係を発展させる基礎が固められるのだ。

中日関係の正常化、特に中国の改革開放後には、中日文化交流の扉が再び開かれた。両国の文化交流が新しいブームを巻き起こしたのである。その扉を通じて、私達は驚くべき隣国を目の当たりにした。発達した経済と文化を持つ、強大で新しい日本である。教師が生徒を見るような気持ちを捨て、全く新しい眼差しを日本に向ける必要があるのだ。特に学んで参考にするという目的を持って、桜の国の背後にある文化的要素を研究すべきなのだ。ここで、日本の文化に関連する事例をいくつか簡単に紹介する。一を以って万を察し、背景事情を捉えていただきたい。

1994年、広島アジア大会の閉幕式が終わった後、6万人の会場にはごみ一つ落ちていなかった。翌日、西側の数紙が「敬うべき恐るべき日本民族！」と競って報道した。秩序、礼節、衛生を重んずる日本が、世界に深く印象づけられたのである。

愛知万博では、様々な文化芸術イベントが目もあやであったが、世界各国の観光客に適度なリズムを感じさせる独特の面白みがあった。米国のキッシンジャー元国務長官が日本を訪問した際、高度な協調性のある日本の接待を大いに賞賛していた。「この分野において日本と比較したら、米国は第三世界にしかない」とまで述べている。日本人が集団の中で高度に協調するという特徴は、敬服に値するものである。

1980年代、米国政府は強大な圧力をかけ、ついに日本のコメ市場を開放するよう迫った。しかし、実際に開放されてみると、攻め込まれたはずの日本の農家はむしろ安堵したのである。安い米国米や中国人に言わせると香ばしくて粘り気があるはずのタイ米では、日本米に慣れた日本人の舌を満足させられなかったのだ！日本の消費者が狂信的といえるほど国産品を愛しているということも、日本人の団結力や国への忠誠を表している。

これほど強力な文化の凝集力を持ちながら、日本が強くない訳があるだろうか！昔から文化大国と自称してはいるが、我が古い大国には立ち後れた部分があり、忘れられた伝統や失われた文化もあることは認めざるを得ない。今や日本の下について学ぶべき時なのである。かつて日本人が貪るように中国文化を学んだ力を私達が発揮する番なのだ。歴史の深い恨みの記憶によって、実際の日本を完全に読み間違ふことがあってはならない。日本文化の精華を真剣に引き出し、中華の伝統文化に再び命を吹き込むのだ。

2010年5月、温家宝首相が訪日した際、即興で「氷が溶けて春水となる。雨が青山を過ぎれば外には緑。大地には草木が茂っている。」という漢詩を詠んだ。私は中国青年の一人として、文化交流が氷を溶かし、歴史の傷を治す良薬になるよう、素晴らしい未来を築けるよう、心から望んでいる。